Vol.159
紀元2682年
令和4年
初夏号
宮崎神宮社務所

宮崎神宮 養正（ようせい）

神事流鏑馬奉幣の儀

「養正（ようせい）」とは

神武天皇が第一代の天皇に即位（そくい）される際のご聖勅（せいちょく）「上ハ則（すなは）チ乾靈（あまつかみ）ノ國ヲ授（さず）ケタマヒシ徳（みうつくしび）ニ答ヘ、下ハ則（すなは）チ皇孫（すめみま）ノ正（ただしきみち）ヲ養（やしな）ヒタマヒシ心（みこころ）ヲ弘メム」からいただいた由緒ある名称です。

ごあいさつ

宮司　本部雅裕

今年も早や、夏越しの大祓を迎へる季節となりました。

氏子崇敬者の皆さまをはじめ、神武養正講社各位におかれましては益々ご清適にお過ごしのこととお慶び申し上げます。また、日ごろのご崇敬、ご協賛に対しましても心より感謝申し上げます。

さて私、去る三月八日より六月三日まで、宮崎日日新聞紙上の自分史シリーズにおいて、「不易と流行―古稀に人生を顧みる―」と題して七十年間の「反省の弁」を述べてまゐりました。

八十五回に亘ります拙文に対して、参道で「宮日見てゐるよ」とか、「毎日原稿を書くのは大変でせう」などと、また電話やメールでもたびたび激励をいただきました。皆さまが、私の文章を興味深く読んでいらっしゃることがよくわかる、充実したこの三カ月でありました。ありがたうございました。

本稿は全体を通して、神社や神道、それに祭祀の変へてはならないことと、その周辺の時代とともに変へていくべきことを比較しながら、なるだけ平易な文章で書き進めてきたつもりです。しかしながら、専門の用語を使ひすぎてかへって分かりにくくなったり、また、私流の下手な「オチ」をねらひすぎて、不謹慎とのそしりを招くような書きやうもあったのではないかと、反省してをります。

それは皆さまに、神道や神社に興味をもって、それに何と言っても「神武さま」を身近に感じていただきたいと庶幾ひ、したためたものです。どうぞ広いお心でお許しください。

今回掲載致しましたことがきっかけになり、宮崎神宮のこと、神道、神社のことなど、全般にわたって興味をお持ちくださいますなら、これにまさる幸せはございません。

いずれこれらの連載は一冊の本にまとめてみたいと思ひ、今準備を進めてゐます。今後どこかでご覧いただければと存じます。

どうぞ皆さまには、これからの暑い夏をお元気にてお過ごしくださいますやう祈りをります。ご参拝お待ち申しあげます。

拙文の「不易と流行」第79回（令和4年5月28日）にて紹介した当宮東神苑の藤。
本年も白と紫の永い花房と甘い香りに誘はれて、多くの家族連れで賑はひました。

紀元二千六百年四月古儀復興

流鏑馬

駒はいばえものゝふ勇む大宮のやぶさめまつりいともにぎはし

全的者（右・日髙一郎源儀幸／左・奈須将利）　馬場には宮崎市観光協会の協力により桟敷席も設けられた。

去る令和四年四月二日・三日、恒例の神事流鏑馬を執り行ひました。

本儀では役射手三名、平騎射五名が奉仕。馬場本より颯爽と駈け出し、射当てられた的が乾いた音とともに割れ、紙片が花吹雪と散ると、観衆からは大きな歓声があがりました。疫禍にあってすっきりしない人々の心が、一瞬にして澄み渡ったやうな気が致しました。

令和二年三月から蔓延したコロナウイルスの影響、また昨年は雨天により神事の一部中止や奉仕者の縮小を余儀なくされ、拝観者も大幅に減少しました。

本年も県外射手の奉仕不可、また垸飯振舞中止等の制限がありましたが、御蔭をもちまして約千五百名の拝観を得て盛大に執り行ふことができました。

夕刻の境内に広がった、日中とはうって変はったその静寂。久方の祭の後の静けさがどこか心地よく、「催事」ではない「神事」たる所以を改めて感じた次第であります。

昭和十五年に、紀元二千六百年奉祝事業の一環として復興されてより八十二年。昨今では人馬の確保や諸道具の老朽化等の課題もございますが、今後とも伝統のままに受け継いでいきたく存じます。皆様には引き続きお心寄せいただきますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

深緑の神苑にくり広げられる勇壮華麗な春の神事流鏑馬は、さながら一幅の絵を見るやうに、懐かしい国振りの歴史を再現してくれます。

維時　令和四年　春　四月　宮崎神宮神事流鏑馬　召立

幟	石塚結喜
太鼓	出光公晴　金野圭祐
先駆	田實ともえ
鉄杖	村川保訓
大麻	串間佑宇　串間凛久
記録役	串間慶士
布施大典　西田　彰	
馬場本役	赤星喜久夫
馬場末役	郡　民夫
総奉行	右松隆央
大幣持	日髙羚太　※三日
一ノ雑色	青井楓　※三日
一ノ童	日髙蓮太
一ノ射手	日髙一郎源儀幸
一ノ弓袋差	石川幸典　※二日 戸髙秀人　※三日
一ノ雑色	廣田忠則
的奉行	黒木壽　岩元飛夏
的奉行控	本部雅裕
宮司	河野公俊
権宮司	
傘持	
神職	
上差袋	日髙憲司
二ノ雑色	青井　楓　※二日
二ノ童	吉田笑舞　※三日
二ノ射手	金野蓮
二ノ弓袋差	大岩根二郎藤原英二
二ノ雑色	後藤駿児　※二日
三ノ雑色	長友貞文　※三日
三ノ童	真崎　蒼　※三日
三ノ射手	横山瑛万　※三日
三ノ弓袋差	佐藤りな
三ノ雑色	安藤太郎藤原定彦
弓司	倉田涼平　※二日
平騎射	中村勇一　※三日 安田成実　※二日 宮崎宣幸 梅原誠史　竹下和雄 安藤祐一郎 野上利彦　奈須将利

宮崎市下北方町鎮座の摂社皇宮神社には古くから、旧六月十五日に祇園祭と称して氏子の人々によって、夏祭が執り行はれてゐました。当日は旧社家の谷口氏方へ主立った人々が集って、和やかな団欒のうちに祭事があり、当日お参りすれば流行病にかからぬといふ信仰から多くの人々で賑はひました。

しかしながら、いつの時代からか衰微して昭和初期にはただわずかに祭典を執行し、土地の人々が参拝するにとどまってゐました。

これを盛大に復興したいと声が挙がったのは、昭和十三年のことでした。地元の下北方町で種々協議が重ねられ、相談の結果、昭和十四年七月三十日に宵祭が執り行はれました。

当日は市内学童の自ら作成した奉納神燈を四百個ほど皇宮屋の台地神前に懸けそなへ、煙火夜市等もあって大変な賑はひを呈しました。大淀川畔の月夜に神様も氏子も共に喜んでこの祭典を楽しく奉仕され、翌三十一日には当日祭が執り行はれました。

ちなみに奉納神燈は、現在でも摂社では園児、また末社では小学生のご協力により絵燈籠として名残を留めてゐます。賑はひの一環として、各々が思ひ思ひの色鮮やかな絵を描かれてゐますが、当時は支那事変の最中にあって、皇軍の武運長久を祈るものでした。

昭和十七年には宵祭に御神楽の奉奏、野菜市を始め下北方の男女青年が古趣豊かな盆踊を奉納されました。

現在でも会場となる下北方公民館には夜店が立ち並び、また太鼓の演奏等もあり、地区住民の手によって非常な賑はひを呈してゐます。

宵祭に神燈を奉献すべく宮崎神宮に集った学童たち（昭和 14 年）

東神苑鎮座の末社五所稲荷神社にも、昔その土地の鎮守様であった時分には、氏子の人々によって夏祭が執り行はれてゐました。

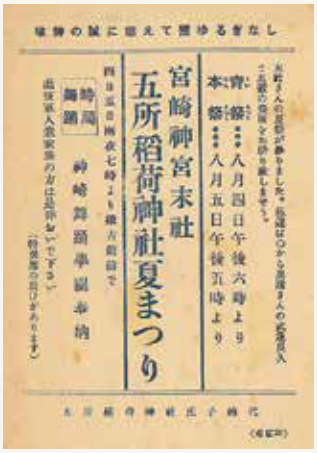
それが何時か絶えて久しいので、何とかこれを復興したいと地元五区区民諸氏の熱望により、稲荷の大神に由縁のある旧六月二十四日に、昭和十三年から復興されることになりました。

七月二十一日神宮町花ヶ島の世話人肝いりで前夜に宵祭があって、植木市その他の夜店、露店も出て福引その他の神賑余興もあり大いに賑はひました。

なほ、祭の趣旨は、

一、国難打開と皇軍の武運長久祈願
二、銃後の糧食増産の祈祷
三、事変下に於て安々と祭の出来る事によって、聖上陛下の御稜威と皇軍将兵の賜物なる事を一層確実に知覚せむとす

とあるやうに、まさに時代を反映するものでありました。



昭和 17 年チラシ。3,500 枚のうち 1,500 枚はバス内に掲示されました。

本年は７月 24・25 日（摂社）、８月３・４日（末社）斎行予定です。

昭和十六年からは猪俣睦藏氏の斡旋により、神崎舞踊学団の小さな子供さん達の可愛い時局舞踊の奉納があり、観衆は数千名の多きに達し賑やかなそしてなごやかな光景を呈しました。

終戦後初めてとなる昭和二十一年には、日向日々新聞社の後援により「市民慰安納涼舞踊大会」として執り行はれました。市内一流演芸家を招き、食糧事情の難しい中にあって、日夜増産でお疲れの氏子の皆様の心を慰め労を労らふとともに、豊年万作をご祈念申し上げました。

神崎舞踊学団による時局舞踊奉納　於東神苑徴古館前（昭和 16 年）
昭和 17 年には、観衆が 3,000 余名に達したやうです。

◆・◆・◆・

神輿を担ぎ始めたのは、明治維新百年にあたる昭和四十三年からでした。明治維新が近代日本発展の基礎であり、これをあらためて再認識しやうとの動きが昂まり、神社本庁を中心として全国的規模で記念行事が執り行はれました。

当宮ではこの一環として子供神輿二基を謹製、また新社号表建立（表枡型築山）や境内整備、神武養正講社の規模拡大等を行ひました。なほ、末社参道の朱塗鳥居十七基も、この時に奉献されました。

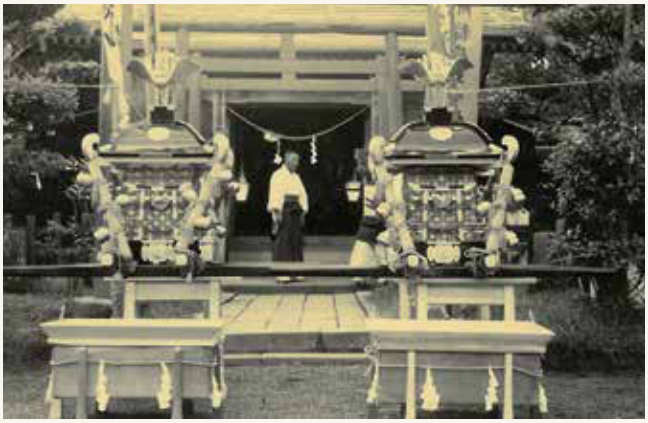
担燈籠の奉仕
かつて末社夏祭時には、大宮国民学校５・６年生 44 名が２組に分かれて、摂社皇宮神社の氏子地域、また橘通や宮崎駅前付近までの道程を往復した記録も残ってゐます。

◆・◆・◆・

復興初期、公的国家的祭祀であった夏祭。時代の流れとともに私的民間的祭祀の要素が多くなり、形を変へつつ今日に受け継がれてきました。

夏祭はもとより、氏神さまのお祭りは地域の歴史や伝統文化、そこに暮らす人々を知る一つの機会であるとも思ひます。

昨今ではコロナ禍にあって祭典のみの奉仕が続いてゐますが、今後とも一家お揃ひで携はっていただき、地域の安寧をお祈りいただければ幸甚に存じます。



神輿は当宮営繕技師であった重永清氏により奉製され、現在に至ります。なほ、この年より地元小学生が御神幸祭（神武さま）に神輿を担いで参加することとなりました。

「神武さまのおすそわけ」認定品奉納奉告祭

本事業にご尽力された皆様に心より感謝申し上げます。

毎年秋に神武天皇ご東遷のご聖業を偲び奉って執り行はれる当宮御神幸祭は、百四十年以上に亘り受け継がれてきた県民に親しまれてゐるお祭りです。

「神武さま」とは本来、ご祭神神武天皇を指すものですが、いつの頃からか日向人の誇りや想ひが親しみとなって、御神幸祭自体を称するやうになりました。

宮崎商工会議所（会頭　米良充典）では、このお祭りのさらなる活性化の一助として、平成三十年より「神武さま」に特化したお土産商品（大福餅等）の開発を進めてこられました。会員より選出の十数名にて構成された実行委員会が中心となり協議を重ね、「神武さまのおすそわけ」といふ認定制度が確立されました。

第一回となる令和三年度は、御菓子司上野「玉依姫抹茶大福」、おかし屋さんｈａｐｉｈａｐｉ「さちつつみ」の二商品が認定され、去る令和四年三月十五日に奉納奉告祭を執り行ひました。

なほ、商品原材料には、神社のお祭りや私たちの食文化と分かちがたい米を使用することが必須とされてゐます。

我が国の稲作の起源は神代に遡ります。天照大御神は天孫降臨に際し、三つの神勅（しんちょく）を天孫に授けます。そのひとつが、人々の食の中心として、天上の田んぼで育てた稲を地上に授けたことを伝へた「斎庭（ゆには）の稲穂の神勅」です。

このお考へは天孫・瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）より現代に至るまで、天皇と国民のこころと共に大切に受け継がれてきました。一説によると、神武天皇もご東遷の際に稲作を各地に普及されたといはれます。

ぜひ商品をいただかれ、稲作を中心として生成発展してきた日本の国柄にも思ひを致してみてはいかがでせうか。

公式ロゴには、ご東遷時の古代船おきよ丸の帆に燦々と輝く太陽が描かれてゐる。

神武養正講社

去る令和四年六月十五日、神宮会館に於て総会を執り行ひました。講員が集っての総会は令和元年以来三年ぶり、また西尾武彦講長が就任して初めてのことで、やうやく皆様に親しくご挨拶申し上げることが叶ひました。未だコロナ禍にあって活動を制限されることがあらうかと思ひますが、講社の目的である御神徳のさらなる発揚及び宮崎神宮の護持運営のためにご協賛賜りますやう、宜しくお願ひ申し上げます。

事　業

令和三年度事業報告

前年度に続き、コロナウイルス感染拡大の影響を受けた一年となった。▼神武天皇祭併講社大祭をはじめとする祭典は、案内が縮小され主に講長以下理事が参列。令和四年紀元祭より、通常通り案内がなされたが直会は中止。▼御神幸祭（神武さま）は中止。▼総会は本誌にて理事会決議事項の報告を行ふのみ。▼理事会は年三回開催。但し十月は書面にて報告を行ふのみ。▼第四十七回皇居勤労奉仕団は、五度目の申請で三月奉仕の許可を得たが、コロナウイルス感染急拡大を受け、受入中止の旨宮内庁より連絡があり奉仕叶はず。▼社報『養正』二回配布。また十二月中旬より三月下旬まで正月破魔矢、神符の授与を行った。

令和四年度事業計画

▼四月三日神武天皇祭併講社大祭は、約百十名が参列されたが、神宮会館での直会は中止。▼御神幸祭は十月二十九・三十日に大淀御旅所往復にて執り行はれる予定。▼理事会は三回開催予定。▼総会は神宮会館にて開催。総会後に本部宮司より講話を賜る▼第四十七回皇居勤労奉仕団は、十一月に派遣予定。団長は西尾武彦講長。▼社報『養正』を二回配布。また正月には破魔矢、神符を授与予定。

理事退任

佐藤　教子　令和四年一月十五日付

役職員改選

名誉講長　本部雅裕（宮司）
講　　長　西尾武彦　※再任
副 講 長　鳥山浩　成松泰子　※再任
理　　事　佐藤武八郎　山口忠信　百野裕子
　　酒井保男　小田原義征　井野義美
　　児玉静雄　※全て再任
常任理事　河野公俊（権宮司）※再任
監　　事　川越悦生　中水明美　※再任
幹　　事　日髙憲司（禰宜）※再任
　　串間慶士（権禰宜）※再任
書　　記　出光弘忠（権禰宜）※再任
○任期は令和七年三月三十一日まで

会　計

一般会計決算及び予算

科目	令和３年度 決算額	令和４年度 予算額	備考
（歳　入）			
諸収入	676,500	937,357	
講費収入	676,000	900,000	講員５区分
受取利息	0	10	普通預金利息
雑収入	500	37,347	寄附金他
前期繰越	589,138	697,643	
歳入計	1,265,638	1,635,000	
（歳　出）			
講社費	517,995	1,075,000	
事業費	274,605	450,000	神徳宣揚費
会議費	43,000	150,000	総会、理事会費
本部費	200,390	340,000	奉仕団諸費、通信費他
交通費	0	5,000	
御神幸祭費	0	100,000	直会費　他
予備費	0	30,000	
式年遷宮積立金支出	50,000	50,000	第63回神宮式年遷宮
次期繰越	697,643	510,000	
歳出計	1,265,638	1,635,000	

一般会計次期繰越金

区分	残高
現金	93,859
郵便振替	487,323
普通預金	116,461
合　計	697,643

積立金会計決算

区分	金額
受取利息	649
前期繰越金	10,878,026
合　計	10,878,675

遷宮積立金会計決算

区分	金額
前期繰越	350,011
受取利息	2
繰入金収入	50,000
合　計	400,013

令和４年５月17日、川越悦生、中水明美両監事に監査を受けました。

◆祭典・奉納行事

一月　一日　歳旦祭　夕御饌始祭　氏子青年会新春禊中止
　　新春奉納揮毫作品展（四四六点）於徴古館（十五日迄）
　　大御饌祭　新春奉納芸能中止
　二日　元始祭　新春奉納芸能中止
　三日　昭和天皇祭遙拝
　七日　元服式（烏帽子親　小山田敏氏・元服者四名）
　十日　成人祭　第五十回新春奉納揮毫作品展表彰式於社務所
二月　一日　宮崎空港ビル五所稲荷神社初午祭
　三日　節分祭　追儺行事縮小
　八日　ＭＲＴ五所稲荷神社初午祭
　十一日　紀元祭　椎浩紀氏奉納揮毫　奉祝式典（日本会議主催）
　　紀元祭奉祝四半的大会中止
　　第四十六回建国記念の日マラソン大会中止
　十四日　摂社破魔矢祭（旧正月十四日）※一部行事縮小
　十七日　祈年祭　御稲種頒種行事

令和４年初詣（正月奉仕の臨時巫女）

御陰をもちまして、コロナ禍前に近い初詣者数となりましたが、予想以上であった為に、新年早々に縁起物の授与が終了となりました。
今回の事例は全国的にも多く見受けられたやうですが、何よりもご迷惑をおかけした皆様に深くお詫び申し上げるばかりであります。
これを踏まえて令和５年は、状況を注視しながら万全の準備を進めてまゐりたく存じます。
お揃ひでのお参りをお待ち申し上げてをります。

◆参拝者数

元日	１０８，０００人	（前年比３８，０００人増）
２日	８０，０００人	（前年比３５，０００人増）
３日	４６，０００人	（前年比１８，０００人増）
合計	２３４，０００人	（前年比９１，０００人増）

二月　十八日　摂末社祈年祭
　二十三日　天長祭
三月　六日　末社初午祭（旧初午）
　二十一日　春季皇霊祭遙拝　春分祭
　二十四日　宮崎空港五所稲荷神社例祭
四月　二日　神事流鏑馬川原祓の儀
　三日　神武天皇祭遙拝　神武天皇祭併神武養正講社大祭
　　神事流鏑馬
　二十九日　昭和祭
五月　十四日　御衣祭（市呉服商有志協力　御衣司　道休邦博氏）
六月　二日　献茶祭（県茶商連合会協力　献茶司　黒木信吾氏）
　五日　御田植祭　於御神田（田長　秦安廣氏）
　三十日　古神符焼納祭　夏越大祓　茅の輪くぐり神事
毎月　三日　月次祭（一・四月を除く）
毎月　十五日　講社月次祭
　※各祭典に併せてコロナウイルス鎮静祈願詞奏上
※各種行事の中止はコロナ禍によるもの

神武養正講社月次祭

神武養正講社は、宮崎神宮の維持運営に協賛することを目的に昭和12年に設立され、当時の講員数は1,100余名を数へたさうです。
昭和12年７月15日には、400余名参列のもと結成奉告祭が斎行され、目出度く講社の誕生の趣が神前に奉告されました。
以来、15日は毎月恒例の講社月次祭の日となり、皇室、国家のご安泰と繁栄、国民や講員のお栄えをお祈り申し上げてをります。

◆正式参拝・団体祈願等◆

令和三年

十二月

一日　宮崎県警察剣道特別訓練員必勝祈願
一日　㈱バッグのあった神恩感謝祭
九日　五神宮職員会正式参拝
十日　ツルヤ㈱創立記念奉告祭
十七日　日本神社ヨガ協会正式参拝　※ヨガ奉納
十八日　㈻青叡舎学院業務隆昌祈願

令和四年

一月

一日　宮崎神宮氏子青年会正式参拝
一日　年頭参拝二〇七社（一月三十一日まで）
二日　神事流鏑馬射手稽古始正式参拝
七日　(公社)宮崎労働基準協会産業安全祈願祭
八日　宮崎青年会議所団体厄祓
八日　宮崎青年会議所シニアクラブ団体還暦祈願
十三日　㈱東海テック安全祈願
十六日　戸敷正氏宮崎市長選挙必勝祈願
十七日　テゲバジャーロ宮崎必勝祈願
三十一日　読売ジャイアンツ必勝祈願　※今村社長

二月

一日　㈱九電工宮崎支店安全祈願
一日　全国共済農業協同組合連合会宮崎県本部目標達成祈願祭
六日　読売ジャイアンツ必勝祈願　※原監督外
六日　椎浩紀氏正式参拝　※建国記念の日奉祝書奉納
十一日　大峰蛇之倉七尾山正式参拝
二十五日　ガリバー宮崎港店商売繁盛祈願

三月

一日　宮崎市消防団防火祈願祭
五日　㈱世界文化ホールディングス事業繁栄祈願
八日　ＪＡ宮崎中央マンゴー部会マンゴー初出荷奉告祭
十五日　宮崎商工会議所「神武さまのおすそわけ」認定商品奉納奉告祭
二十四日　㈱安藤・間九州支店安全祈願
三月二十四日　宮崎神宮宮童正式参拝　※卒業・進級式
三十日　寛木材社内安全祈願

四月

一日　㈱テレビ宮崎安全祈願
一日　テレビ宮崎商事㈱安全祈願
一日　㈱ｓｈｉｎはじめ鍼灸整骨院商売繁盛祈願
一日　宮崎太陽銀行社運隆昌祈願
一日　㈱九州エナジー安全祈願
一日　㈱システム開発安全祈願
一日　宮崎電子機器㈱安全祈願
三日　日向学院三八会団体還暦祈願
五日　㈻青叡舎学院安全祈願
五日　ヤマト運輸㈱宮崎主管支店社内安全祈願
五日　㈱リクリア商売繁昌祈願
十二日　宮崎神宮敬神婦人会正式参拝　※総会
十四日　ピリ辛おばちゃん商売繁昌祈願
二十一日　宮崎商工会議所青年部安全祈願
二十一日　宮崎県神道青年会正式参拝　※総会
二十五日　九鉄工業㈱安全祈願
二十六日　宮崎県神社庁宮崎市支部正式参拝　※総会

五月

七日　宮崎太陽銀行平和台支店安全祈願
十日　宮交グループ創立記念奉告祭
十六日　九州地区中堅神職研修会正式参拝
二十一日　㈻青叡舎学院社運隆昌祈願
二十一日　幸田会団体古稀祈願
二十一日　宮崎大宮高等学校サッカー部必勝祈願
二十二日　エリナ会正式参拝
二十三日　㈱西尾組参道看板撤去安全清祓
二十三日　世紀東急工業㈱社運隆昌祈願
二十四日　皇學館大学神道学科研究室神社史研究会正式参拝
二十四日　㈱ファームテック安全祈願
二十五日　江坂設備工業㈱正式参拝
二十九日　宮崎神宮宮童正式参拝　※委嘱式

”献詠短歌”

「宮崎神宮献詠短歌会」は、昭和十六年三月に発足しました。爾来八十年の長きに亘り、三十一文字に思ひを込めて献歌してきました。

■令和三年被表彰者

成績優秀者に対し、選者より推薦を受けて表彰を行ひました。

宮崎神宮賞　濱田眞理子
選者賞　黒木和貴子
選者賞　野田　香織

■選者交代のお知らせ

堀家博子先生には、長友捷先生の後任として平成二十二年一月よりご就任いただきました。以来、十三年に亘り懇切丁寧にご指導くださいましたことに、深く感謝し御礼を申し上げます。

なほ、後任として令和四年七月より小池洋子先生がご就任されました。新たな選者をお迎えし、当会が益々発展することを願ひます。

■問ひ合せ先

宮崎神宮献詠短歌会事務局
電話〇九八五（二七）四〇〇四
担当　須田　出光　松元

■令和三年十二月　兼題「街」

天
クリスマスキャロル流れる街角に
募金をつのる子らの声する
日南市　黒岩　昭彦

地
コロナ禍に街行く人もまばらなり
冬の花火に終息願う
宮崎市　右松多恵子

人
夕映えの街の公園子ら去りてベン
チに媼の語らひ止まず
宮崎市　黒木和貴子

秀逸
街なかを早足に行く夢に覚め真夜
の暫しを病む足さする
宮崎市　鐘ヶ江和貴

寒空に街行く人も襟を立て家路に
急ぐ師走となれり
寒川町　寺原　聖山

佳作
街行けば百人中百人マスクしてコ
ロナの禍ひなほ収まらず
熊本市　松山　浩一

街灯なき坂道にわれを待ちくれし
杳き日の父思ひ出でたり
宮崎市　小松　京子

姉の居る施設へ通ふ春の日の街路
樹のイペーただに明るし
宮崎市　小池　洋子

選者詠
歳末の街に連れ立ちし友も去り早
八年か互みに老いぬ

■令和四年一月　兼題「朝」

天
早春の馬事公苑を駆けりくる人馬
一体朝日まとひて
宮崎市　黒木和貴子

地
けふ一日ささやかながら是好日な
らむ朝のラジオにモーツァルト聴く
熊本市　松山　浩一

人
澄みわたるみそらを照らし昇り朝
日をろがむうからとともに
宮崎市　黒木　和子

秀逸
よき波を迎ふる構へサーファーら
沖を見据える朝の青島
文京区　遠藤　玲奈

歩かねば動けなくなる吾に言い朝
露光る田の道行く
西都市　渡邊　経子

佳作
朝の日を浴びて草引く蕪の中大き
くなあれと呟きながら
宮崎市　和田　洋子

ふるさとに絶えて久しき元朝の若
潮氏神に供ふる習ひ
宮崎市　鐘ヶ江和貴

歳の瀬に初孫生るる喜びに迎ふる
朝の耀きてをり
寒川町　寺原　聖山

選者詠
遮るなく窓に朝日を拝みしも遥か
となりぬ家々建ちて

■令和四年二月　兼題「寒」

天
寒稽古の少年剣士ら境内を雄叫び
あげて走り出したり
宮崎市　本部　雅裕

地
年越しのそば作りゐし母を恋ふ子
等に配ると寒き朝より
宮崎市　濱田眞理子

人
ザクザクと霜柱踏み遊ぶ子ら寒さ
を忘れ音とたわむる
宮崎市　右松多恵子

秀逸
寒いから外に出ないで気を付けて
朝朝気遣い娘出掛けぬ
小林市　永友　チエ

保健所の支援に向かふ朝まだき寒
風を突き駅へと急ぐ
宮崎市　黒木　雅裕

佳作
米寿過ぎ寒さに弱くなりし夫窓越
しに愛づる庭の紅梅
宮崎市　黒木和貴子

寒き夜は温もり求め添い寝する老
いたる猫のね息にさそわれ
南九州市　赤坂よし子

寒の餅うから集いて搗きし日よ貧
しき中にも笑う声して
宮崎市　和田　洋子

選者詠
寒鰤の入荷を告ぐる昼のニュース
夕餉は切り身の塩焼きにせむ

■令和四年三月　兼題「芽」

天
咲きませと庭に埋めしチューリップ今朝尖りたる太き芽の出づ
宮崎市　黒木ふさを

地
如月の野焼きの終へし東都原古墳の面に若芽萌え出づ
宮崎市　本部　雅裕

人
終戦の芽を摘むごとく砲弾はキエフの街を焼きつくし居り
日南市　黒岩　昭彦

秀逸
シクラメンの薄紅の芽のあまた生ひ戦なき世をひた願ふ朝
宮崎市　黒木　和子

庭隅にひつそり芽を出す蕗の薹摘み草好みし母をし想ふ
宮崎市　鐘ヶ江和貴

佳作
タラの芽を貰ひし翁返礼をせぬまま姿見かけずなりぬ
宮崎市　小池　洋子

在りし日の夫の撫でゐし猫柳新芽にふるればほのぼのとして
宮崎市　小松　京子

待ち待ちし木の芽起しの雨上り春野菜の種子プランターに蒔く
西都市　渡邊　経子

選者詠
棚に置き冬を越したるチューリップ慌てて埋めぬ球根五つ

■令和四年四月　兼題「声」

天
巣立ちゆく孫は明るき声残し一歩踏み出す夢に向かひて
宮崎市　黒木和貴子

地
「始めませ」長の掛け声早乙女はウォーとこたへ早苗植ゑそむ
日南市　黒岩　昭彦

人
英霊の御声聞こゆがに咲き満ちる護国の宮の今年の桜
宮崎市　黒木　和子

秀逸
東欧の戦止めむと声を挙げ青と黄の旗人ら振りたり
宮崎市　本部　雅裕

大舞台に声高らかにベートーヴェン「第九」歌ひし遠き思ひ出
宮崎市　鐘ヶ江和貴

佳作
桜舞ふ学舎の庭若きらの声清らかに校歌歌へり
寒川町　寺原　聖山

パソコンの操作電話に教へくるる子の声やさし繰り返しつつ
宮崎市　小池　洋子

選者詠
パソコンに日々向かふ部屋本棚の母の写真に声を掛けては

■令和四年五月　兼題「空」

天
おだやけき五月の空を仰ぎつつ砲弾飛び交ふウクライナ思ふ
宮崎市　黒木　雅裕

地
晴れわたる四月の空を発つ一機夢と希望の若きを乗せて
宮崎市　濱田眞理子

人
子の住める東京の空映し出す午後のニュースに独りの昼餉
倉敷市　萩原　節子

秀逸
早出する夫見送りし日を思ふ西空に白き月浮かびゐし
宮崎市　小松　京子

晴れわたる皐月の空を仰ぎたりまばゆきばかりの新緑のとき
豊頃町　髙木みどり

佳作
大空にジェット雲の尾をひきて彼方に消ゆる音のみ残し
南九州市　赤坂よし子

迫害を受けつづけたるウイグルの人らを放て大空のもとへ
宮崎市　黒木　和子

国民をプロパガンダで押さえ込み空恐しきロシアの侵攻
宮崎市　梅﨑　辰實

選者詠
パレットに溶かしてみたき空の色草取りせむか狭庭に降りて

◆職員動向

令和四年一月から令和四年六月まで

【社内辞令】

巫女　篠原　鈴菜
願に依りその職を免ずる
（令和四年一月三十一日）

◆責任役員委嘱

神野　利男　※再任
春山　豪志　※再任
福良　公一　※再任
山﨑　正彦　※再任
長濱　保廣　※再任
橋口　光雄　※新任
落合　眞一　※新任
（各通令和四年四月一日）

長年に亘りお務めいただきました岩切達郎、佐藤勇夫両氏には衷心より厚く御礼申し上げます。

◆総代委嘱

野中　高志　※再任
山口　忠信　※再任
西尾　武彦　※再任
横山雄一郎　※再任
百野　裕子　※再任
時任　孝俊　※再任
甲斐　正文　※再任
三田井研一　※再任
黒木　信吾　※再任
宮下繁一郎　※再任
渡邊眞一郎　※再任
池田　典昭　※再任
（各通令和四年四月一日）

神武の杜（じんむ　もり）から

㉙

宮崎県神社庁庁舎、神宮会館開館五十周年

昭和四十七年九月二十五日　神殿鎮座祭

御祭神　天照皇大神　県内神社の御祭神

昭和 47 年９月 26 日に竣工奉告祭が執り行はれ、同年 10 月１日にオープンしました。

去る昭和四十五年十一月の神社庁総会において神社会館建設の事が発議され、満場一致を以て承認されました。戦後神社庁は宮崎神宮のなみなみならぬ御好意の下に社務所の一隅をしめて、その機能を果してまゐりましたが、最近の県神社界の進展拡充に伴ひ独自の庁舎を持つ必要に迫られてをりました。又我々の神社会館を持ちたいとは戦前・戦後を通じて神社界の悲願でありました。今や漸くその念願達成の機運に遭遇したのであります。

よつて神社庁関係者検討の結果、宮崎県神社会館建設の事は神社庁設立二十五周年記念事業として実行に移すことになりました。なほ会館はただ単に庁舎としての事務的機能を果すのみならず、神職、総代等の各種研修会、結婚式披露宴、宿泊施設等を有するものでありますが、神社庁の運営が従来負担金のみに頼つて行はれてきたものを、会館施設の積極的活用により漸次負担金を軽減する方向にもつて行くのみならず、将来は交付金等の名目をもつて、各神社の援助を行ひたいとの積極的構想を有するものであります。

（宮崎県神社会館建設趣意書より引用）

皆で祝ふハレの日

当宮社務所西側にある神宮会館。全国でも初めて神社庁が式場経営といふことで、各県神社庁から注目を浴びました。

開館した当時は、第一次ベビーブームによる世代が適齢期を迎へたことにより、結婚ラッシュの時でありました。

緑に囲まれた当宮本殿での婚儀も、土曜日曜となると一日に十数件を数へる日も多かったやうで、互ひに連携を図りながら順調な運営がなされてきました。

しかしながら、コロナ禍により婚儀及び披露宴の中止や延期が相次ぎ、また人と人が集ふことも難しくなったことから、披露宴参列人数も大幅に減少したやうです。

かつてのやうに、新たな門出を迎へた両家を祝福する喜びの声が、神武さまの森にこだまする。そんな日が一日も早く戻ってくることを願ってやみません。

養正

Vol.159

紀元 2682 年　令和４年　初夏号

発行　宮崎神宮社務所　宮崎市神宮２丁目４番１号　電話 0985(27)4004　FAX0985(27)4030　◎編集　養正編集室　◎印刷所　愛文社印刷㈱

https://miyazakijingu.or.jp/